



Title	ナウルズの祭典における地区展示：ウズベキスタン・スルハンダリア州の事例
Author(s)	志田, 夏美
Citation	日本中央アジア学会報, 20, 92-98
Issue Date	2024-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.20.92
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98900
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	JB20_017shida.pdf



ナウルーズの祭典における地区展示 —— ウズベキスタン・スルハンダリア州の事例 ——

志田 夏美

はじめに

筆者は、ウズベキスタンに暮らす遊牧的伝統を保持する人々——ウズベク牧畜民——に関心をもっており、スルハンダリア州ボイスン郡にてフィールドワークをおこなっている。ここでは現在も家内工業による絨毯織りがおこなわれているからである。絨毯は、元来、家畜の毛を原料に織られたため牧畜経済に特有の生産物であった。現在では原料に綿が用いられるケースも多くなっているが、それでも絨毯作りという営み自体は、ごくありふれた生活の営みの一つとしておこなわれている。

草原とオアシス双方の文化を有するウズベキスタンにおいて、遊牧民の物質文化を代表する絨毯が「伝統」や「民族文化」としてどのように扱われているのか。筆者は、できれば国立博物館の展示にみられるような官製の民族史における位置づけではなく、地元住民による「われわれの」文化としての位置づけをとらえたいと考えてきた。そこで、3月21日の祝日にむけて各地で開催される「ナウルーズの国民／民族祭典 (Navro'z xalq sayllari)」のうち、スルハンダリア州の会場の地区展示を参照することにした。後述するようにこの祭典は行政が主催するものだが、展示品は学校の郷土資料室や住民の自宅から持ち寄られたものであり、その展示構成は地元のマハッラ職員に一任されている。その点で、研究者が構成した博物館展示とは異なるものとして、「われわれの」文化表象をみる好例と考えた。

調査対象の概要

2024年のスルハンダリア州のナウルーズの祭典は、各行政区にて次の日程で開催された。3月14日にバンディホン郡 (*Bandixon tumani*)、ボイスン郡 (*Boysun tumani*)、ジャルクルガン郡 (*Jarqo'rg'on tumani*)、15日にサリアシア郡 (*Sariosiyo tumani*)、クズルク郡 (*Qiziriq tumani*)、シュルチ郡 (*Sho'rchi tumani*)、16日にオルティンサイ郡 (*Oltinsoy tumani*)、クムクルガン郡 (*Qumqo'rg'on tumani*)、シェラバード郡 (*Sherobod tumani*)、17日にデナウ郡 (*Denov tumani*)、ウズン郡 (*Uzun tumani*)、ムズラバト郡 (*Muzrabot tumani*)、18日にアンゴル郡 (*Angor*

tumani)、テルメズ郡 (Termiz tumani)、19日にテルメズ市 (Termiz shahri) 共催の州の主要祝典 (Viloyatning asosiy bayram sayli) が執り行われた⁽¹⁾。このうち筆者は、3月14日のボイスン郡の祭典会場と、3月19日のテルメズ市共催の州の祭典会場に足を運んだ。

会場は大きく分けて、歌や踊りを披露する演芸ステージと展示スペースから成る。前者には座席が用意され、有名歌手が登場することもあり、州規模の祭典では招待客のみ入場が許される。筆者は、前年に観賞したことがあるため本年は入場しなかった。そのため、本稿であつかう情報はすべて展示スペースの見学から得たものである。

ボイスン郡の祭典《会場：ボイスン市 青少年レクリエーション広場(Yoshlar istirohat bog'i)》

会場の全体像は図1の通りである。演芸ステージのほかに、移動式住居のウトウ(o'tov)、木製縁台のディヴァン(divan)、古道具や民族料理などの民族誌資料展示、手工芸職人による展示販売、伝統格闘技クラシュ(kurash)の競技場、子どもの遊技場、曲芸ショー、野外レストランなどのコーナーから成る。ディヴァン上には、長座布団のクルパチャ(ko'rpacha)やローテーブルが置かれ、弦楽器のドンブラ(do'mbila)をもったバフシ(bakhshi)による弾語

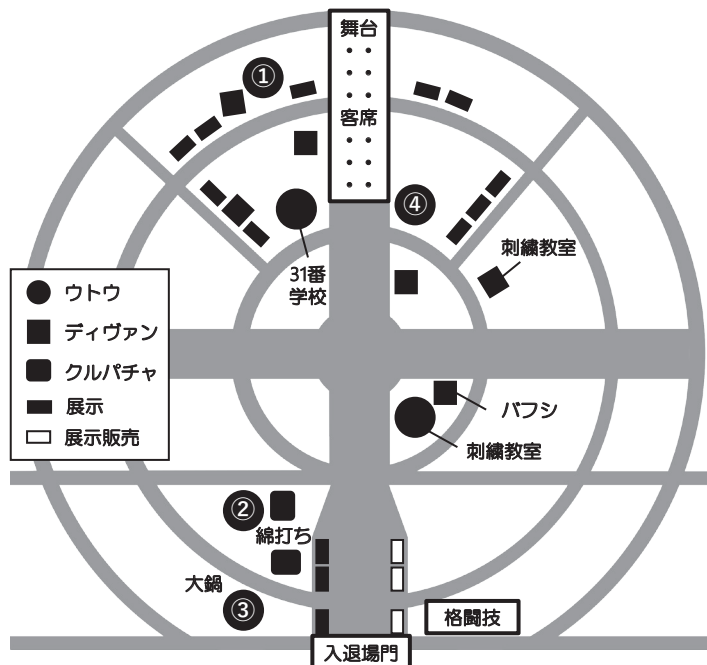


図1 ボイスン郡の祭典会場の全体図

⁽¹⁾ Surxondaryo viloyati hokimligi, 2024年3月13日, Facebook, URL: <https://fb.watch/r6KCcAQAmQ/>, 閲覧日 2024年3月29日。



写真1 綿打ちと糸紡ぎ(右手前)の様子

り、刺繍のデモンストレーションが随時おこなわれていた。ウトウの周囲では、地面に絨毯とクルパチャが敷かれ、糸紡ぎや綿打ち〔写真1〕のデモンストレーションが時折おこなわれたり、大鍋で作った油脂と砂糖を煮詰めたペースト菓子のハルワ(halva)が来場者にふるまわれたりしていた。これらのデモンストレーションに携わる人は、多くの場合、民族衣裳に身を包んでいた。

ウトウは全部で6つあり、基本的には関係者の休憩所として使用されていた。その内外は、大判刺繍のスザナ(so'zana)や、横に細長い刺繍のザルデヴォル(zardevor)などで飾られていることが多く、外側の装飾には絹の絨織物のアトラス(atlas)が用いられていることもあった〔写真2〕。床には平織絨毯のパラス(palas)が敷かれていた。必ずしも近くに関係者がいるわけではなかったため、ウトウ本体や装飾品の所有者を正確に把握することはむずかしかった。しかしながら、聞き取った情報を概観すると、2つの学校(Boysun barkamolavlod bolalar maktabi、31-maktab)と、ボイスン郡を構成する4つのマハッラ・セクター(sektor)⁽²⁾から出展されているらしかった。

民族誌資料は、会場の至る所に展示されていた。たいていテーブルの上に資料が並べられ、出展元の学校名などが表記されていた(5, 12, 30, 32, 35, 48, 49-maktab、5, 8-DMTT、Boysun ko'ptarmoqli texnikumi、Boysun tuman 2-son kasb-hunar maktabi)。標本資料としては、土製の容器や木製の調理器具と食器、織物に関連する古い小道具のほか、比較的最近作られた民族帽のドウッピ(do'ppi)、パッチワーク布のクラク(quroq)、アラビア書道絵画や書見台、当日

(2) ソ連期の村議会(Кишлачный совет)を基本的に引き継ぎながら改組・再編した行政単位で、各セクターには隣接する8～11のマハッラが含まれる。



写真 2 アトラス等で飾ったウトウと展示の様子

調理して持ち込まれた実物の民族料理が展示されていた。

スルハンダリア州の祭典《会場：テルメズ市 芸術宮殿 (San'at saroyi) 内》

展示スペースの全体像は図2の通りである。州を構成する15の各行政区のほかに、子どもの遊技場と就学前教育と学校教育部門 (Maktabgacha va maktab ta'lim bo'limi) [図2の枠外ジャルクルガン後方]の展示ブースから成る。各地区展示場内にも演芸ステージがあり、民

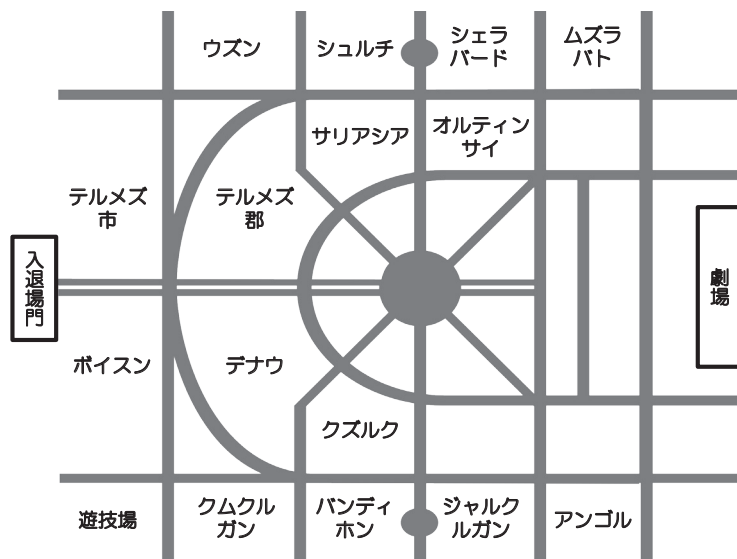


図 2 スルハンダリア州の祭典会場の全体図 (展示スペースのみ)

族衣裳を着た少女や老女による舞踊やバフシによる演奏が随時おこなわれていた。

建造物として、ジャルクルガンを除く各地区に1～3つウトウが設置されていた。オルティンサイやシェラバードのウトウは骨組みが金属製で、アンゴルのもは2分の1サイズに輪切りにした疑似的なものだった。ジャルクルガンには土壁の家屋と2階建てのやぐらがあり、ムズラバト、シェラバードにも後者があった。これらは基本的に関係者の待機スペースとして利用されていた。装飾には総じて、スザナやザルデヴォル、アトラス、クラクが用いられていた。ウトウの戸口上部には、逆三角に飾る刺繍布のブクチャ(*bukcha*)ないしブグジャマ(*bo'g'joma*)⁽³⁾が数多く見られ、内側に婚礼用カーテンや房飾りが掛けられている例もあった。床面には、もれなくコクマ(*qoqma*)織りのパラスが敷かれていたが、クムクルガンのみガジャリ(*gajari*)織りのパラスを内側壁の装飾として用いていた。刺繍製品について質問すると、たいいて「祖母や母、おばたちが作った」という返事がかえってくるように、1970～80年代に作られたものが多いようだったが、テルメズ市のウトウの装飾はボイスンの手工芸職人の作品によるものだった。一方、パラスはさほど古くなく、製作者がわかる場合は比較的新しく織られたものだった。ウトウと同様に、ディヴァンもクムクルガンを除く各地区に1～3台置かれていた。木工彫刻の施された天蓋付きのもの、アトラスなどの布で簡易的に屋根を付けたもの、屋根のないものがあった。座面には、コクマ織りのパラス(ジャルクルガンのみガジャリ織り)とクルパチャが敷かれ、食卓布がローテーブルか敷物の上に広げられていることが多かった。食卓布の上に民族料理を並べて展示している例もあれば、ボイスンでは先述の手工芸職人による刺繍、クズルクでは糸紡ぎや綿打ち、カード織りなどの手工芸、デナウではバフシによる弾語りなどのデモンストレーションがおこなわれていた。

手工芸に関連するものとして、数多くの地区展示に織機が設置されており、垂直型と地面に固定する水平型のものがあった。前者を設置していたのはバンディホン、デナウ、オルティンサイ、テルメズ市で、いずれもタキル(*takir*)織りが、後者はアンゴル、ボイスン、ムズラバトで、コクマ織りが途中まで織られていた。サリアシアではコクマ織りを模した小型の木枠が置かれ、同様にクムクルガンでは垂直に立てかけた木枠にタキル織り、水平に置いた木枠にテルマ(*terma*)織りが表現されていた〔写真3〕。織機を設置していない場合でも、織物やフェルトに関連する道具やその完成品は全地区で展示されていた(テルメズ郡のみ機械製カーペットも展示していた)。ボイスンやシュルチなどでは、それら手工芸品の展示販売ブースも用意されていた。テキスタイル以外の手工芸品としては、人形、木工彫刻(柱や書見台、

(3) 本来、ブクチャは花嫁の持参財(衣服やシャツなどの布製品)を包む布製の袋物で、ブグジャマは同じく持参財の寝具を包む大きな布であり、両者とも家財道具を積み重ねたユク(*yuk*)を彩る装飾として用いられた。布の一つの隅に刺繍やフリンジなどを施し、その装飾部分がみえるよう、封筒のように逆三角の形に飾った(なかには装飾部分だけを切り離した三角布の場合もあった)。かつてブグジャマはパラスから作られたが、後に布から作られるようになった。



写真3 織機の模型(クムクルガン)

弦楽器など)、陶器、衣服・帽子、刺繍絵画などがあった。

食文化に関連するものとして、土製の容器や木製の調理器と食器、実物の民族料理(テルメズ郡のみトルクメン料理)のほか、野菜やフルーツなどの食材が展示されていた。たとえば、川や湖を模したプールに魚が放たれ、柵のなかにはヒツジやヤギが囲われていた。他にも猛禽類、穀類、ワインなどがあった。ナウルーズの祝いに欠かせない麦汁を一晩中煮詰めたペースト菓子のスマラク(*sumalak*)は、民族料理と同様、試食を兼ねて展示されたものだった。また、木製の農具や乳製品作りの器具、粘土製の窯のタンディル(*tandir*)などが設置されている例もあった。

他には、各地区の観光名所や特産品をあらわす大型の模型が展示されていた。たとえば、サリアシアのサンガルダクの滝、ボイスンのオモンホナの聖泉、ムズラバトのカンプル・テパ遺跡、テルメズ郡のテルメズ・オタ廟、アンゴルの風車とシャシリク、シェラバードのザクロ、ジャルクルガン他のドンブラなどがあった。また、各地区にまつわる偉人の書物、絵画、郷土資料館や専門学校などの紹介ブースも見られた。

むすびにかえて

2つの会場の展示を総合的にみると、いわば定番の展示品があることがわかった。すなわち、ウトウ、ディヴァン、クルパチャ、スザナ、ザルデヴォル、パラス、織物関連用具、土製の容器や木製調理器具と食器、そして実物の民族料理である。また、定番のデモンストレーションとしては、民族衣裳を着た少女たちの踊り、老女による糸紡ぎや綿打ち、男性バフシによる演奏をあげることができる。

ウトウの装飾には、スザナやザルデヴォルが使われ、逆にパラスはほとんど敷物としてしか使用されていなかった。当該地域の20世紀後半の様子に鑑みると、このような装飾は元来のものとは異なる。民族学者 Б. Х. Кармышева [1985: 266–267] によると、かつて半遊牧ウズベクの間では装飾的なフェルトや毛皮、毛織物が用いられ、オアシス定住民の間に普及していた大判の刺繍は見られなかったという。筆者は、刺繍製品を用いた装飾方法について、「真正な」伝統的用法ではないと一蹴してしまうのではなく、むしろ現地住民の再解釈の結果、つまり「われわれの」文化を表す事例の一つと捉えたい。このような装飾の質的変容は、遊牧民の間における定住民の生活様式の受容を物語るものであり、このテーマのさらなる追究は、草原とオアシスの文化的交流の近現代史の解明の手がかりとなるだろう。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22KJ1939 の助成を受けたものです。また、同国におけるフィールドワークは〈松下幸之助国際スカラシップ〉により実現しました。ここに記して御礼申し上げます。

参考文献

Кармышева, Б. Х. 1985. Юрта в современном быт у узбеков: Мастера ее убранства // Народные мастера Традиции, школы Выпуск I / Под ред. М. А. Некрасовой. М.: Изобразительное искусство. С. 256–269.

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)